

細胞腫2例を経験した。発端者は43歳男性、腹部不快感を主訴に来院、2例めは発端者の長男、14歳男児で、意識消失発作を契機に発症、両者とも、高血圧、ノルアドレナリン高値、画像より、両側性褐色細胞腫の診断は比較的容易であった。一方、膵腫瘍に関して、両者とも内分泌学的に異常はなく、画像上も確定診断は困難であった。

なお、膵ラ氏島腫瘍合併例は1987年現在、Griffithsらによれば本邦例2例を含め、世界でも16例と極めて珍しく、貴重な例である。さらに今回経験した2症例とも神経内分泌顆粒を染め出すglimelius染色に、副腎・膵腫瘍とも強陽性で、内分泌学的にも、腫瘍の起源を考える上でも意義深いと考えられる。

特別講演

中枢神経系の核医学診断

新潟大学医学部放射線医学教室

小田野 幾 雄 助教授

第17回新潟救急医学会

日時 昭和63年11月19日(土)

午後2時より

会場 新潟大学医学部大講堂

一般演題

1) 3点式シートベルトによる脊椎損傷の3例

羽尾 清昭・谷代 弘三
勝見 政寛・渡辺 政則
中屋 愛作・今井 春雄
八木沢克則・吉津 孝衛
牧 裕
本間 隆夫 (新潟大学) (整形外科)

事故発生時における搭乗者の被害を減少させるという目的で開発されたシートベルトは開発当初2点式であったが、その後改良が重ねられ現在3点式シートベルトが普及されている。昭和61年11月からシートベルトの着用の義務付け以来、死亡事故は減少したが、シートベルトによる外傷が散見される。今回、3点式シートベルトが原因であると考えられる頸椎損傷2例、腰椎損傷1例を経験した。

症例1は20才、女性、第3頸椎亜脱臼のため、頸椎前方固定術を施行し、経過良好である。症例2は72才、女

性、環軸椎脱臼のため死亡した。症例3は18才、男性、第一腰椎圧迫骨折で保存的に治療した。メカニズムは頸椎では衝突の急減速で肩ベルトが支点となり頭部の慣性のため頸椎が過屈曲を強制されるによると思われる、症例3では肩ベルトが支点となり腰椎に屈曲力と回旋力が生じたためと思われる。

2) ドクターズカーの利用状況と運用上の問題点

本多 拓・樋熊 紀雄 (新潟市民病院)

小田 良彦 (同 新生児医療センター)

新潟市民病院救命救急センターにドクターズカーが導入されて1年7ヶ月が過ぎた。その間に救命救急センター29件、新生児医療センター244件、計273回(15件/月)の出動があった。新生児医療センターは患者搬送が殆どであったが、救命救急センターの利用は病状安定患者の病院間搬送が大部分であった。

初療時の病状安定化に果す医師の役割は当然である。迅速な医師の確保、同乗者の身分保証、車輛の管理などの諸問題はクリア出来ても、新潟市民病院に滞りず、巾広く医療機関が利用出来るにはどうあったらよいか、更には当地方における救急医療は如何に方向づけるか、各界からなる総合的機関での検討が待たれる。

救急車との分担の明確化、ドクターズカーと救急車の協力の在り方なども大切な課題である。

3) 救急事故種別に対する救急患者の観察と処置並びに救急医療体制について

鷺津 由松 (新潟市西消防署) (小針救急分隊長)

救急隊は、救急事故を15種類に分類していますが、そのうち、労災事故と自損についての症例をあげ、私なりの所感を申し上げます。

労災事故例として、某食品工場で従業員の女性が、食品加工機の回転軸に右腕を肘近くまで巻き込まれ、抜くことが出来なくなった事故で、N病院の医師と看護婦から救急車で現場に来ていただき、点滴と麻酔を施し、回転軸を逆回転させ救助したもので、結果は右手挫滅切断でありましたが、医師現場派遣により救助した少ない例であります。自損については、中年の男性が腹部を庖丁で切創し腸が露出していたもので、応急手当を施し、T病院に連絡をとったが、手術中で収容不能との返事により新大救急部と市民病院に指令室を通じ依頼し、走行していたところ、容態が急変したため、たまたま、新大付近でもあったので返答がないまま新大病院に搬送し処置